

## 書評

### 紛争地の人々に寄り添う日本人ジャーナリスト

福田 幸正  
開発経済調査部主任研究員  
(公財) 国際通貨研究所

高野秀行 (2013) 『謎の独立国家ソマリランド』本の雑誌社  
田原牧 (2014) 『ジャスミンの残り香:「アラブの春」が変えたもの』集英社

ジャーナリストに憧れた時期があった。90年代初め、図らずもカイロ駐在を命じられた。まさか中東に関わることになるとは予想もしていなかったし、中東問題は難しそうなので、それまでは無意識にも避けてきた。ところが、実際に中東駐在となればそうも言っていられない。専門家と言われる人をつかまえては、恥もなくこれはという文献を聞き出した。その一つが、イギリスの著名な中東問題ジャーナリスト、Robert Fisk のレバノン紛争を扱った *Pity the Nation*。中東問題の吹き溜まりとしてのレバノン紛争の生々しい実態に驚かされたが、それと同時にジャーナリストに対する見方が変わった。何と熱き心と冷めた頭脳を兼ね備えた人物なのかと。自分には到底真似ができない職業と直感したが、いまだに密かに憧れている。

紛争地の奥深くに事も無げに分け入り、現地の市井の人々としなやかに交わることができるジャーナリストが日本にもいるのだ、と久々に熱くさせられた二冊をご紹介します。

\*\*\*\*\*

高野秀行 (2013) 『謎の独立国家ソマリランド』本の雑誌社

ソマリアと言えば、映画『ブラックホーク・ダウン』を思い出す。90年代半ば、内戦に介入した結果、米軍を中心とする国連部隊は悲惨な撤退を強いられた。ようやく2005年になって暫定政府が樹立されたが、内戦状態は続いている。最近ではイスラム過激派組織アルシャバーブが出現し、隣国ケニアもそのテロに脅かされている。また、ソマリア沿岸では海賊が出没し、タンカー等が狙われる事件が多発した。ソマリアは危ない国として敬遠するのが普通の感覚だろう。

あるとき著者は、ソマリアの北部にソマリランドという国際的には承認されていない独立国家が存在することを知る。さらにソマリランドでは、氏族間の交渉の結果、政治的な安定の実現と立憲民主主義制度の構築に成功しているという。紛争に明け暮れる破綻国家と思いこんでいたソマリアに、平和な独立国家があることを自分の目で確かめようと、ポーンと旅立ってしまう。このフットワークの軽さは、さすがもと探検部。

ソマリア人と終日カート薬(弱い麻薬)を頬張り、好奇心の赴くままよもやま話を重ね

る。このようにしてソマリア人以上にエンジョイするせいか、お互いに心を許せる人の輪を自然体で広げていく。著者のこのキャラは羨ましい。そして一見遊んでいるようであり、結果的には立派なフィールドワークに仕上がっている。重要なのは、ソマリアの政治、経済、社会、文化を丸ごと理解しようとする姿勢に貫かれていることだ。それに実際に現場を見てきた人の言葉には説得力がある。しかし、煎じつめると、実は著者はたまたま人間が恋しいのだと思う。それが著者をソマリランドに、そして世界の僻地探訪に駆り立てているのだろう。なお、山内昌之や武内進一といったその道の権威がこの本と著者をほとんど無邪気なまでに絶賛しており、あらためて両学者の澄んだ目と器の大きさに感じ入った。

**【参考】ソマリア、ソマリランド、プントランド**



(出所) BBC

●ソマリアの国内紛争の軸となっているのは、単一民族ソマリア人（ほとんどがスンニ派イスラム教徒）の中の父系の血族集団である氏族間の対立。これは異なる民族間の争いを抱える他の多くのアフリカの国々とは大きく異なる点。

●現在のソマリアは、北西部のソマリランド、北東部のプントランド、

南部のソマリアの三地域に分かれている。ソマリランドは1991年に独立を宣言して政府を樹立した。ソマリランドの独立は国際的に承認されていないが、氏族間の交渉の結果、政治的な安定の実現と立憲民主主義制度の構築に成功してきた。一方、プントランドは、独立ではなく、あくまでもソマリア国内の自治政府として1998年に樹立された。なお、ソマリランドとプントランドの境界線周辺では領有権を巡って小競り合いが続いている。

●北部ソマリアが比較的安定している要因としては、イギリス領時代にイギリスは氏族の長老を活用する間接統治を採ったことがあげられる。一方、南部ではイタリア領時代、イタリア人の入植が進み、土着の長老制度の破壊が進んだことが、現在の不安定に結びついているといわれている。

\*\*\*\*\*

田原牧 (2014) 『ジャスミンの残り香:「アラブの春」が変えたもの』 集英社

この本を読んでいると、カイロのあの独特な匂いがしてくるのが不思議だ。「アラブの春」から早四年経つ。チュニジア、エジプト、リビアの独裁者を次々と倒していった民衆運動はその後大きく変容した。シリア、イラクは内戦が常態化し、それが自国に波及することを恐れる湾岸諸国は、エジプトを中東の安定の要として押し立て運命共同体化しつつある。最近ではイランが国際社会に復帰する兆しがあり、これがどう中

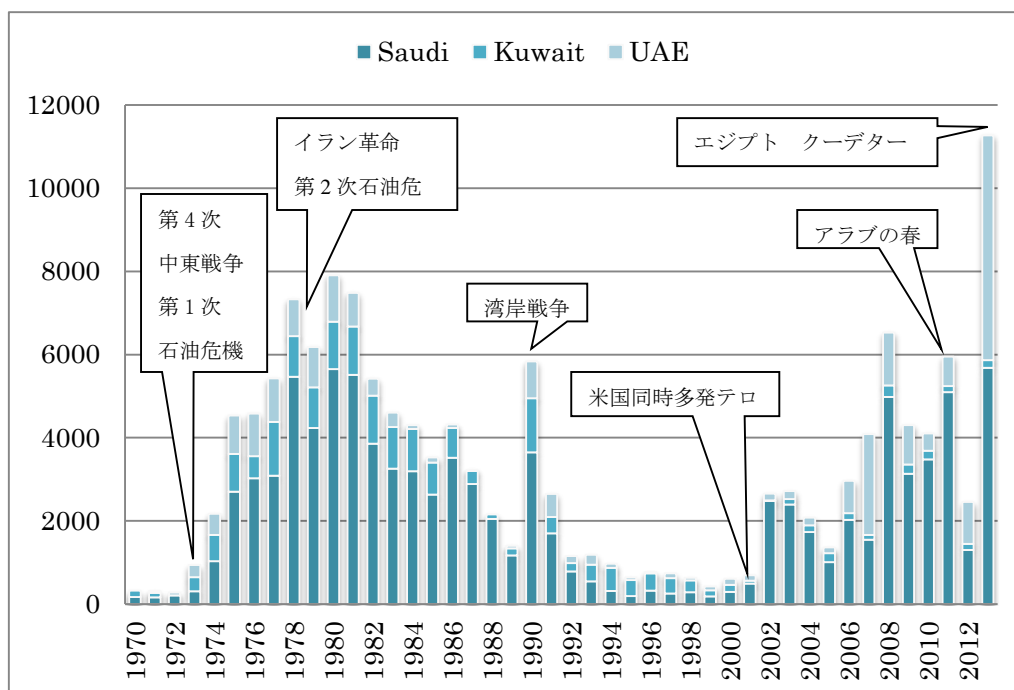
東情勢に影響するか注目されている。このように中東は大きく変わった、そして今も変わりつつある。エジプトに関しては、事実上のクーデターを経て強権政治に逆戻りした感がある。「アラブの春」は一体何だったのか、著者は様々な人々に会い問う。そして自問する。タヒリール広場に集まったエジプト人は、革命の、生と死が一挙に燃え上がるような刺激を知ってしまったのだ。

盤石な軍政下ではもはや希望など抱けないのでは、との著者の質問に対し、語学留学時代のエジプト人の恩師は、次の言葉で締めくくっている。「そう、状況はとても厳しい。厳しいけれど、不可能ではないはずよ。その行く末を決められるのは私たちしかない。私たちはその三年で、人として強くなったと思う。でも、まだきっと足りないのでしょう。だから、もっと強くならなければならない。生きている間、あと一度だけでいい。あの三年前の美しい日を見てみたい」

### 【参考】湾岸産油国の ODA の推移

湾岸産油国は、これまでそのオイルマネーの一部を ODA に振り向けてきた。その増減は、油価の変動や中東地域の政治情勢に大きく影響を受けてきた。2013 年 7 月、エジプトにおいて事実上のクーデターによって暫定政権が発足して以来、湾岸諸国の ODA は急増し、2013 年では 112.8 億ドルと、同年の日本の ODA 総額 115.8 億ドルに匹敵する高額の支出され、さらにそのほとんどはエジプトに向けられた模様だ。2014 年もエジプトを中心に同レベルの支出が見込まれる。ここからも、「アラブの春」を経て不安定化する中東情勢の中で、エジプトと湾岸諸国の運命共同体化が見て取れる。

主要湾岸ドナーの ODA の推移 (1970~2013 年、ネット、百万ドル)



(出所) OECD DAC Database より作成